特集

新潟大学の100冊

学生生活の中で、
さまざまなものを見て触れて学び、
身につけてほしい――――。

新潟大学では多くの先生が多彩な分野で研究し、
それらを書籍としてまとめています。
出版されている本の種類や数は、非常に豊富。
その中で厳選に厳選を重ね、
学生のみなさんに読んでほしい本をピックアップしました。
興味のある分野の本をぜひじっくり読んで、
知識を身につけてください。

Niigata University 100 Books

●人文学部 ●教育人間科学部 ●経済学部 ●理学部 ●医学部医学科
●医学部保健学科 ●工学部 ●農学部 ●現代社会文化研究科 ●実務法学研究科

01

形態論

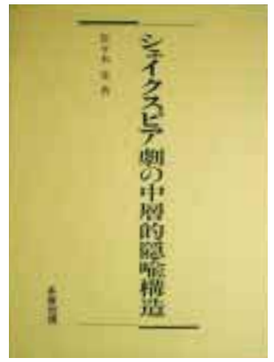
大石　強（開拓社／1988年）

本書は、英語において可能な語はいかに作り出されるのか、また、作られた新語が文中で適切に用いられるための情報はどのように得られるかという視点から書かれており、生成文法の新知見を示すと共に、従来の問題の解決案も示している。昭和63年度に、英語学関係の優れた著書に与えられる市河賞を受賞した。

02

シェイクスピア劇の中層的隠喩構造

佐々木　充（多賀出版／1994年）



「中層的隠喩構造」という聞きなれない題名にしてありますが、シェイクスピアの劇の表層と深層を結ぶ中間地帯をこのように名付けました。ここには様々な比喩やイメージがあり、組織体を形成し意味作用をなしています。それを追究したのがこの本です。

03

詩の空間と〈声〉―フランス近代詩と発話者―

高木　裕（駿河台出版社／1994年）

フランスのロマン派の詩人から、ネルヴァル、ボードレール、ヴェルレーヌにいたる象徴主義の詩人を対象に、詩のテクスト空間に読みとられる発話者の声の特徴に着目し、詩人は＜声＞の修辞を駆使することによって、いかに巧みに詩的空間を構築しているかを追究し、そこに近代詩の一つの特徴があると指摘した。

04

平安朝音楽制度史

荻　美津夫（吉川弘文館／1994年）

平安時代の王卿貴族社会において、音楽は政たる儀礼遂行の荘厳化を果し、他方では教養として彼らの間で奏楽された。その音楽機関として存在したのが雅楽寮や楽所であり、殿上や地下の楽家楽人が祗候し音楽が教習された。本書ではこれらの音楽機関の実態や変遷、その担い手である楽人・舞人の系譜や活動に関して明らかにした。

05 動物は世界をどう見るか

鈴木光太郎（新曜社／1995年）

動物が世界をどのようにとらえているのかを、これまでのさまざまな研究をもとに考察したものです。とくに視覚に焦点をあてて、視力や視野の違い、色・形・動き・奥行きのとらえ方、方向感覚などを11の章で詳述しています。最後の章では、動物の感じている世界のシミュレーションがどこまで可能かも考えています。

06 日本近世の地域と流通

原　直史（山川出版社／1996年）

江戸時代、房総半島でさかんに生産されたイワシ魚肥の流通を対象に、漁村の生産者、輸送経路の運輸業者、集散地の問屋などが連携しながら作り上げられていく流通のシステムを全体として明らかにし、村々の駄賃稼ぎ層の動向など、こうしたシステムを動揺させる存在との対抗関係も含めて解明した。

07 視覚の謎

本田仁視（福村出版／1998年）

ものが見えるということは、私たちが考えているよりもはるかに複雑なしくみにもとづいている。本書では「人の顔だけが見えない」、「さっき見たものが目の前から消えない」といったさまざまな視覚・認知機能障害の症例報告を手がかりにして、「見る」という心のはたらきを支える脳のしくみを、わかりやすく解明していく。

08 科学から哲学へ ―知識をめぐる虚構と現実

佐藤徹郎（春秋社／2000年）

この本の主なテーマは、「知識とは何か」「知識を伝えるとはどういうことか」といった基本的な問題に遡って、科学技術の知識と哲学や宗教から得られる知識との違いを明らかにすることです。知識の進歩や学問の進歩についての誤解を解き、個人の営みとしての知的探究の意義を再確認することが本書の目的と言えるでしょう。

09 環日本海地域社会の変容

「満蒙」・「間島」と「裏日本」

芳井研一（青木書店／2000年）

国民国家形成期に「辺境」とされた諸地域を襲った歴史の波を、「満蒙」・「間島」「裏日本」を基軸に描いた研究書である。近代日本が、日本海をはさんで向き合う諸地域の変容にどのように関わったかをふり返ることで、地域住民が協生する新たな地域間関係を築くことが出来るよう期待しつつ執筆した。

10 ぎりぎり合格への論文マニュアル

山内志朗（平凡社新書／2001年）

論文執筆法は「硬い」本ばっかりなので、変化球のつもりで書いたのだが、類書がなかったせいかとても売れた。今では、定番としてロングセラーだそうだ。卒論を書く人は心構えを作るために読んでください。なお、「すぐに使えるフレーズ集」は、半分は冗談なのだが、全国で本気で使っている論文があると報告されている。注意すべし。

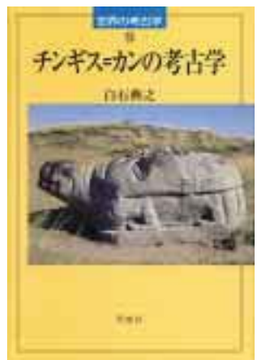
11 言葉の建築術 ――マンデリシュターム研究1

鈴木正美（群像社／2001年）

20世紀ロシアを代表する詩人オシップ・マンデリシュターム（1891-1938）の第1詩集『石』（1913）を中心に彼の初期作品を詳細に分析し、詩の創造のプロセスについて考察する。言葉、フランソア・ヴィヨン、ゴシック建築、引用、映画、音楽、進化論など比較文学・文化的なさまざまなアプローチを試みる。

12 チンギス=カンの考古学

白石典之（同成社／2001年）



ユーラシアの東西にまたがる巨大国家モンゴル帝国。それを築いたのがチンギス=カン。有名だが謎の多い人物だ。それは文字資料が伝説的で信憑性がないからだ。そこで筆者は文字ではなく、遺跡や遺物を扱う考古学から検討した。本書では平易な語り口と豊富な写真・図版によってチンギス=カンの真の姿が浮き彫りにされている。

13

毒消し売りの社会史 女性・家・村

佐藤康行（日本経済評論社／2002年）

薬売りといえば富山が有名ですが、越後の女性たちも毒消し売りをしていました。身近な女性の人生を辿ることによって、普通の女性たちが日本のなかでいかなる近現代史を生きてきたかを等身大でとらえようと考えました。私たちはいま歴史のなかで何を伝えていくのか。この問いにたいして、私なりに出したささやかなひとつの答えです。

14

日本中世戦国期の地域と民衆

矢田俊文（清文堂／2002年）

日本中世の戦国期の村・村連合、都市、豊臣期以後の統一権力の地域支配に関する論文を集めたもの。従来の歴史学の枠組みによる研究だけではなく、中世考古学の成果を取り入れた論文や、自然と人間の関係を考える歴史学をめざして執筆された明応地震の津波被害をうけた港湾都市橋本・安濃津に関する論文も収められている。

15

近代の漁撈技術と民俗

池田哲夫（吉川弘文館／2004年）

江戸時代末期に佐渡で開発された「佐渡式イカ釣具」は、近代以降日本海沿岸地域に急速に伝わり広まりました。本書では、その分布と伝播のありようについて、従来の民俗学の伝播論に「技術移動」という新たな概念を提示して、伝播の実態を体系的に明らかにしようとしたものです。

16

ヘーゲル 生きてゆく力としての弁証法

栗原　隆（NHK出版／2004年）

狭量で未形成な意識が直面する矛盾・対立を〈自ら否定する〉ことを通してこそ、思弁的理性へと教養形成や認識の進展が図られることを跡付ける論理であった弁証法は、矛盾・葛藤に苛まされる人生の難局を突破する方途を指し示しもすることが出来ることを、ヘーゲルの最新のテクストに基づいて明らかにした。

17

お笑い進化論

井山弘幸（青弓社ライブラリー／2005年）

科学論という看板を背負っている私がどうして《お笑い》の本を書いたかと言うと純粋に好きだからです。爆笑オンエアバトルの審査員をやったり、売れない芸人さんのために台本を書くのも、お笑いが好きだからです。今書いている科学的発見論が仕上がったら、やはり好きだという理由で、宮澤賢治のことも書いてみたいと思っています。

18

神話から見た古代東地中海沿岸の文化交流

高橋秀樹（高志書院／2005年）

欧米の文明の源とされる古代ギリシア文明に近隣諸文明が大きな影響を与えていたことを、新しい観点から強調しようとする研究が少しずつ出てきている。そのため、古代ギリシア文明と近隣諸文明の均質性と異質性の両面が改めて検討されねばならなくなっている。本書は、神話の比較からこの問題に取り組もうとするものである。

19

日本映画はアメリカでどう観られてきたか

北野圭介（平凡社新書／2005年）

自分が日ごろ見慣れているものが、異なる国の人には別様に見られていた。そんな経験は、国際化がすすむ昨今めずらしいことではない。映画もまた、土地が変われば鑑賞の仕方が変わってしまうことが少なくない。日米を行き来する中、日本映画の捉え方が二つの国で大きく違うことに気づいた筆者の経験をもとに書かれた本。

20

平安期日記文芸の研究

石坂妙子（新典社／1996年）

平安時代・日記文学・女房・周縁的視点、これが本書のキーワードです。ある侍女（土佐日記の語り手）・道綱母・和泉式部・紫式部・孝標女たちが、貴人に仕える女房という立場からいかにして＜作家＞に転身したか、について考察しています。物語でもなく、出来事の単なる記録でもない日記文学の特質を知りたい方にお勧めです。

21 生涯学習から地域教育改革へ

相庭和彦（明石書店／1999年）

本書は、戦後我が国の地域教育政策がどのような特色をもって展開されたのかを概観したものです。この政策の特色を把握するため本書では、生涯学習論の視点から地域社会の変遷を分析しました。やや、専門的記述が多いですが、地域教育の歴史や地域文化政策の分析、および生涯学習論に関心のある学生に読んでもらいたい本です。

22 産地の社会学

伊賀光屋（多賀出版／2000年）

本書は、産地の活力を「共同効果」や「範囲（特化）の経済」から説明している柔軟な特化の理論を批判し、諸産地の比較調査に基づいて競争力の源泉が「インフォーマリティ」の活用や「時間の経済」の追求にあることを明らかにした。日本労働社会学年報第12集、地域社会学会年報第15集に書評あり。

23 創造的技能領域における熟達化の認知心理学的研究

大浦容子（風間書房／2000年）

音楽のエキスパートになるというのはどういう事なんだろう?どんな練習をすると上手に演奏できるようになるんだろう?そもそも音楽を聴いている時、 私たちの頭の中でどのようなことが起きているんだろう?音楽が好きで、音楽の理解と享受のメカニズムや「エキスパートになる」事に興味を持っている人にお薦めします。

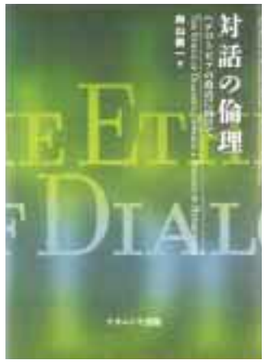
24 知識獲得の過程:科学的概念の獲得と教育

中島伸子（風間書房／2000年）

小さな子どもでも、日常経験に基づいて身の回りの物事についての首尾一貫した日常的概念を構成するが、それは科学的概念と対立することが多い。本書ではこうした科学的概念を子どもはどのように理解し、それは発達に伴いどのように変化するのか、有効な教授法はどのようなものかを筆者の行った調査結果をもとに論じている。

25 対話の倫理

向山恭一（ナカニシヤ出版／2001年）



世界では「文明の衝突」と呼ばれる紛争がいまだ絶えませんが、その多くは自分のアイデンティティに固執することから生まれています。そうであるならば、意見のちがう人たちとの対話をつうじて、自分をしなやかに変えていく倫理がもとめられているのではないでしょうか。そんなことを本書では論じてみました。ぜひご一読を。

26 近代日本とアイヌ社会

麓　慎一（山川出版社／2002年）

近代日本とアイヌ社会の関係を歴史的視点から分析した本です。特に1899（明治32）年3月に制定された「北海道旧土人保護法」の歴史的意義とその影響を中心に日本とアイヌ社会の関係を検討しました。この本を読めば、明治という国家が何を考えてアイヌ政策を推進していたのかを具体的に知っていただけると思います。

27 新製品開発の失敗の本質

高山　誠（東京図書出版会／2002年）

画期的な新製品をいかに出し続けるか。この永遠の課題を、新薬開発を巡る日本企業の失敗事例の分析をもとに探る。戦略的な提携などで他社技術を積極導入し、絶えず研究開発の間口を広げているだけでは、継続的な成功は望めない。市場シェアに安住していると新市場を作る商品の開発に失敗する。業種を問わず通じる教訓を語っている。

28 公会計革命

桜内文城（講談社／2004年）

「日本の政治、経済、民主主義を立て直したい」という思いで開発した公会計システム「国ナビ（国家財政ナビゲーションシステム）」について、公会計のあるべき姿を描いている。会社が株主によりチェックされているように、国民が主権者として国の会計の良し悪しを直接チェックする方法と考え方を示している。公会計だけでなく国のあり方に関心を持つことができる。

29

水中火山岩 —アトラスと用語解説

山岸宏光（北海道大学図書刊行会／1994年）

海底など水中で形成された火山岩は陸上とは異なった形態をしめす。このような火山岩について、その成因や組成の違いにもとづく様々な形態について、世界や日本各地から集めた実際例を写真と図版で示したもの。火山地質学に関する著書は多数あるが、水中火山岩のみを扱った本書は世界でも類がない。用語解説と和英対訳付き。

30

[徹底理解] 線形代数

渡部　剛・加賀利宏・吉原久夫（培風館／1997年）

重要な基本的事項を豊富な例とともに徹底的に詳しく解説し、間違いやすい所はキケンのロゴを置いて特に注意を喚起してある。また随所にコラムを入れて関連事項の別の視点からの知識を与えて興味を持たせる工夫もしてある。

31

食べる免疫力

安保　徹（世界文化社／2005年）

免疫力を高めることにより、がん、アトピー性皮膚炎や慢性疾患も治るという安保理論を日常の食物を通じてどのように実践できるかを身近なところから説明。免疫理論の勉強と食生活の改善の両方が図れる。しかも簡単に調理できるものばかりなので、一人暮らしの生活改善の参考になる。

32

口腔ケア 健康教育から在宅ケアまで

山本澄子ほか（朝日出版社／1991年）

歯科医師と看護職の歯周疾患に対する連携の必要性から作られた書籍である。歯周疾患が日常の生活習慣に大きく関与していることから、患者の日常生活上における口腔ケアの理解と重要性を考え、実践への活用教材として、口腔のしくみ、健康、保清、ケア、対策等を考えたものである。

33

介護を支える知識と技術

西山悦子（中央法規出版／1995年）

本著は、「家庭看護講座」において、一般の方々がレベルの高い介護ができるための医学、生理学、看護学の基本と技術をまとめたものである。これらの知識を基に、介護に携わる人々が、1人ひとりのお年寄りに合った方法を工夫し、作り上げて介護にあってほしい。「介護」は人ごとのように思われる方も多いかと思うが、男性でも、女性でも、重要な自分の家族の健康に対して自信を持って対応するために、是非本書を役立ててほしい。

34

摂食障害の家族心理教育

後藤雅博（編・著）（金剛出版／2000年）

疾病や障害についての正確な情報、知識を家族と共有し、さらに家族グループで日常的な対処法を学ぶ「家族心理教育」は統合失調症や気分障害に有効とされている。それを摂食障害に適用するためのガイドブック。総論からプログラム運営のノウハウ、評価法まで実践者が解説しており、すぐ使用できる資料も豊富に収録している。

35

学生のためのExcel

大久保真樹（考古堂／2004年）

学生の多くは、Excel（表計算ソフト）を「一応使える」ようです。しかし、その使い方をみてみると、自己流で、効率の悪い使い方をしている人が大勢いました。この本は、「自分は使えてるから大丈夫」と思い込んでいる方に、お勧めします。「一応使える」から「使いこなせる」へ、ステップアップすることが目標です。

36

医療倫理学の方法 原則・手順・ナラティヴ

宮坂道夫（医学書院／2005年）

この本は、米欧で発達してきた医療倫理学の理論を消化して、安楽死、生殖医療、臓器移植など、医療倫理の問題を詳細に考えるための手がかりを提供しようという意図で書きました。医療の道へ進む人にも、そうでない人にも読んでもらいたいと思います。「意見は異なっても、方法は共有できる」というのが、この本の姿勢です。

37 技術にも自治がある

大熊　孝（農文協／2004年）

明治時代以降、公共事業における技術は、国の補助金や技術基準によって国に独占されてきたが、それが地方分権の時代にはなじまない状況になってきた。本書では、日本の自然の特徴を縄文文化から明らかにし、その豊かな自然を前提として地域住民が担ってきた川文化をローテクとハイテクの融合によって再生することを問うた。

38 哺乳類の生物学④社会

三浦慎悟（東京大学出版会／1998年）

世界には4800種の哺乳類がいる。ネズミからゾウまで、サイズと形態は多彩であり、そこには、高い知能と個性あふれる行動によって織りなされる多様な社会構造や配偶システムが展開されている。この本は、行動生態学の視点から彼らの社会がどのように進化したのかを追跡した。それはヒトの社会へとつながっていく。

39 中国農村合作社の改革

青柳　斉（日本経済評論社／2002年）

本書の基本的なテーマは、中国の供銷合作社（購買販売協同組合）の展開過程と現状の分析を通して、共産党政権下の現代中国における農民協同組合の展開可能性を探ることである。内容の多くは、供銷社の歴史的経過や現状の問題、改革方向、展望に関して、文献・資料や現地調査に依拠して解説している。

40 シベリアの森林

阿部信行（日本林業調査会／2004年）

本書はロシアの研究成果を翻訳して紹介しているので貴重であり、シベリアの森林状況がよく分かるでしょう。一方、森林調査やシベリア森林研究所に滞在した際の出来事はコラム欄で紹介している。シベリアの自然、そこに暮す人々、ロシアの事情を熱く紹介しており、読後、シベリアの森に行ってみたいと感じることでしょう。

41 満鉄調査部:関係者の証言

井村哲郎（アジア経済研究所／1996年）

満鉄調査部は戦前日本では最大の調査機関であり、中国、ソ連調査を精力的に行なった。4万点をこえる報告書、雑誌論文などが残されており、戦前期の中国を研究する際には必須のものも多い。本書はそこに所属した人たちによる調査課題の設定、調査方法とその問題点などについての座談会、聞き取りの記録である。現在は絶版。

42 小町伝説の誕生

錦　仁（角川選書／2004年）

小町伝説は誰によって作られ、どのように改変され、伝えられてきたのだろうか。本書では、全国に百以上もある小町伝説地から秋田県湯沢市雄勝をとりあげ、詳細に検討する。従来の民俗学的研究を超克し、また通説を否定し、新しい方法で日本文化の基層にするどく迫った。

43 高志の城柵

小林昌二（高志書院／2005年）

研究成果を社会に還元しようと人文学部選書の第1冊として企画された。『日本書紀』大化3年（648）条で知られながら未発見の「渟足柵」など北陸・高志の城柵の先端的調査と研究をわかりやすく論述したものである。1990年に発見された「沼垂城」木簡などで広がった新しい歴史像が浮かび上がっている。

44 クーデタを裁く 1932年7月20日事件法廷記録

山下威士（尚学社／2003年）

埼玉大学から新潟大学へ、山を越えて赴任してきのは、ここに盛られた資料を読みこむためでした。1932年7月20日事件という、ドイツ・ヴァイマルの時の首相パーペンによる、憲法無視のクーデタをめぐる国事（憲法）裁判を扱っています。その7日間にわたる法廷での緊迫したやりとりは、下手なドラマよりも、よほど面白いものです。私が、これについての最初の原稿を発表してからでも17年がたっている、まことに遅々とした歩みを続けている、私の研究の最近の集大成です。

著書名	著者名	所属	出版社名	発行年
普遍論争	山内志朗	人文学部	哲学書房	1992
眼球運動と空間定位	本田仁視	人文学部	風間書房	1994
偶然の科学誌	井山弘幸	人文学部	大修館書店	1995
鏡のなかのアインシュタイン	井山弘幸	人文学部	化学同人	1998
西域文書からみた中国史	關尾史郎	人文学部	山川出版社	1998
日本中世戦国期権力構造の研究	矢田俊文	人文学部	塙書房	1998
意識／無意識のサイエンス	本田仁視	人文学部	福村出版	2000
アルカイック期アテナイと党争	高橋秀樹	人文学部	多賀出版	2001
天使の記号学	山内志朗	人文学部	岩波書店	2001
ハリウッド100年史講義	北野圭介	人文学部	平凡社新書	2001
モンゴル帝国史の考古学的研究	白石典之	人文学部	同成社	2002
ライプニッツ:なぜ私は世界にひとりしかいないのか	山内志朗	人文学部	日本放送出版協会	2003
デモクラシー・リフレクション	伊藤守・渡邊登・松井克浩・杉原名穂子	人文学部	リベルタ出版	2005
笑いと哲学の微妙な関係	山内志朗	人文学部	哲学書房	2005
熱力学	横田伊佐秋	理学部	岩波書店	1987
北海道の地すべり地形	山岸宏光	理学部	北海道大学図書刊行会	1993
大学における共通知のありか	栗原隆・濱口哲共編	理学部	東北大学出版会	2005
精神科リハビリテーション（1）援助技法の実際	後藤雅博・伊藤順一郎・遊佐安一郎編・著	医学部保健学科看護学	星和書店	1995
SSTの進歩	SST普及協会（「SSTの進歩」編集委員会:後藤雅博・安西信雄・天笠崇・池淵恵美ほか4名）	医学部保健学科看護学	創造出版	1996
家族教室のすすめ方 ―心理教育的アプローチによる家族援助の実際―	後藤雅博編・著	医学部保健学科看護学	金剛出版	1998
医療倫理　よりよい決定のための事例分析（2）	ペンス（宮坂道夫・長岡成夫訳）	医学部保健学科看護学	みすず書房	2000
看護学Ⅰ　改訂版	山本澄子	医学部保健学科看護学	七賢出版	2000
医療倫理　よりよい決定のための事例分析（1）	ペンス（宮坂道夫・長岡成夫訳）	医学部保健学科看護学	みすず書房	2001
臨床検査技術学13　免疫検査学　第3版	折笠道昭ほか	医学部保健学科検査技術科学	医学書院	2003
IVRの臨床と被曝防護	中村仁信・富樫厚彦・諸澄邦彦	医学部保健学科放射線科学	医療科学社	2004
ブックレットシリーズ3　IVRに伴う放射線皮膚障害の防止に関するガイドライン ―Q&Aと解説―	栗井一夫・水谷宏・富樫厚彦ほか共編	医学部保健学科放射線科学	医療放射線防護連絡協議会	2004
放射線安全管理学	富樫厚彦・鈴木昇一・西谷源展共著	医学部保健学科放射線科学	オーム社	2005
利根川治水の変遷と水害	大熊孝	工学部	東大出版会	1981
洪水と治水の河川史	大熊孝	工学部	平凡社	1988
川を制した近代技術	大熊孝編・著	工学部	平凡社	1994
川がつくった川、人がつくった川	大熊孝	工学部	ポプラ社	1995
動物と植物の利用しあう関係	箕口秀夫（分担執筆）	農学部	平凡社	1993
作物の生理・生態学大要	池田武編・著	農学部	養賢堂	1995
種子散布 ―助け合いの進化論＜1＞	紙谷智彦（分担執筆）	農学部	築地書館	1999
野生動物の生態と農林業被害	三浦慎悟	農学部	全国林業改良普及協会	1999
植物資源生産学概論	池田武・葭田隆治編・著	農学部	養賢堂	2000
土壌・肥料・植物栄養学用語集	日本土壌肥料学会編・大山卓爾（分担執筆）	農学部	養賢堂	2000

著書名	著者名	所属	出版社名	発行年
植物栄養学	森敏他編・大山卓爾（分担執筆）	農学部	文永堂	2001
「植物栄養・肥料の事典」	事典編集委員会編・大山卓爾（分担執筆）	農学部	朝倉書店	2001
生殖工学のための講座 ―卵子研究法―	新村末雄（分担執筆）	農学部	養賢堂	2001
生態学からみた身近な植物群落の保護	紙谷智彦（分担執筆）	農学部	講談社サイエンティフィク	2001
転作全書（第二巻）ダイズ・アズキ	大山卓爾・高橋能彦（分担執筆）	農学部	農文協	2001
微生物からのメッセージ ―21世紀に活かす道	堀秀隆他編・大山卓爾（分担執筆）	農学部	エンタープライズ	2001
動物たちの気になる行動（1）	箕口秀夫（分担執筆）	農学部	裳華房	2002
次世代の農薬開発―ニューナノテクノロジーによる探索と創製	日本農薬学会編・堀秀隆（分担執筆）	農学部	ソフトサイエンス社	2003
粗食は大敵 ―長生きする人ほど、肉も魚もよく食べる―	鈴木敦士・田島真	農学部	はまの出版	2003
玄米黒酢農法	池田武ほか2名	農学部	農文協	2004
新編農学大事典	事典編集委員会編・大山卓爾・末吉邦（分担執筆）	農学部	養賢堂	2004
生命の誕生に向けて ―生殖補助医療(ART)胚培養の理論と実際―	新村末雄（分担執筆）	農学部	近代出版	2005
農業経営の新展開とネットワーク	青柳斉（分担執筆）	農学部	農林統計協会	2005
農協の経営問題と改革方向	青柳斉	農学部	筑波書房	2005
Bacillus thuringiensis 殺虫蛋白質の科学 ―環境保全型生物農 薬から抗ガン活性まで	堀秀隆（分担執筆）	農学部	アイピーシー出版	2005
申命記の文献学的研究	鈴木佳秀	現代社会文化研究科	日本基督教団出版局	1987
中世和歌の研究	錦仁	現代社会文化研究科	桜楓社	1991
旧約聖書の女性たち	鈴木佳秀	現代社会文化研究科	教文館	1993
百人一首倉山抄	錦仁	現代社会文化研究科	和泉書院	1995
1940年代の東アジア:文献解題	井村哲郎	現代社会文化研究科	アジア経済研究所	1997
日本古代の村落と農民支配	小林昌二	現代社会文化研究科	塙書房	2000
浮遊する小野小町	錦仁	現代社会文化研究科	笠間書院	2001
良くある質問　分析化学の基礎　反応と計算	澤田清・山田真吉	自然科学研究科	講談社（講談社サイエンティフィック）	2005
カール・シュミット研究　危機政府と保守革命運動	山下威士	実務法学研究科	南窓社	1986
憲法学と憲法	山下威士	実務法学研究科	南窓社	1987
改訂増補版　平和と人権の法	山下威士・根森健・山下泰子	実務法学研究科	南窓社	1991
大学生のヤリ方	山下威士・水谷暢・栗原眞佐子編	実務法学研究科・現代社会文化研究科・法学部	尚学社	1997
法律文献学入門 ―法令・判例・文献の調べ方	西野喜一	実務法学研究科	成文堂	2002
産廃法談 ―法学者のウラ読み廃棄物処理法	北村喜宣・福士明・下井康史	実務法学研究科	環境新聞社	2004
Q&Aこんな時どうする?個人情報保護	鈴木正朝・岡村久道	実務法学研究科	日本経済新聞社	2005
これだけは知っておきたい個人情報保護	鈴木正朝・岡村久道	実務法学研究科	日本経済新聞社	2005
新版　女性の権利　ハンドブック女性差別撤廃条約	赤松良子監修・国政女性の地位協会編・山下威士ほか著	実務法学研究科	岩波書店	2005

Booklet
NIIGATA UNIVERSITY
ブックレット 新潟大学

ブックレット新潟大学は、新潟大学の博士課程の大学院が教育研究活動の一端を社会に向けて発信するものです。
現代社会文化研究科の発案により、平成14年から地域貢献活動の一つとして刊行をスタート。
中高校生から社会人までの広い世代を読者層として、専門的な内容を読みやすく執筆しています。

著書名	著者名	所属	発行年
「日本海」という呼称	芳井研一	人文学部	2002年 2月
「能」と佐渡・越後	荻美津夫	人文学部	2002年 2月
新潟から考える環境倫理	栗原　隆	人文学部	2002年 3月
敦煌への道	関尾史郎・玄　幸子	人文学部	2002年 8月
食べる	花田晃治・野田忠ほか	歯学部	2002年 8月
ロシアはどこからやって来たか	中沢敦夫	人文学部	2002年10月
あなたの知らない英語の法則	大石　強・秋　孝道	人文学部	2002年10月
にいがたビジネス物語	永山庸男・澁谷覚・齋藤達弘	経済学部	2002年12月
新潟の戦後補償	西埜　章	法学部	2002年12月
良寛のひとり遊び	中西久味	人文学部	2003年 2月
「お笑い」を学問する	井山弘幸	人文学部	2003年 2月
昆虫を殺すウイルスの話	早川　徹	自然科学研究科	2003年 2月
新潟に多い病気	山本正治ほか	医学部	2003年 4月
失った体への対応	高橋姿・柴田実ほか	医学部・医歯学総合病院	2003年 4月
接合の科学	大橋修・山口典男	自然科学研究科	2003年 6月
腎臓の病気とその研究	山本　格ほか	医学部	2003年 6月
最新医療のはなし	染矢俊幸ほか	医学部	2003年 6月
〈女〉で読むドイツ文学	三浦　淳	人文学部	2003年 8月
分子がつくる香りの世界	萩原久大・吉井文子	自然科学研究科	2003年 8月
アブラハム　約束を背負わされた父と子	鈴木佳秀	現代社会文化研究科	2003年10月
留学生と新潟の国際化	南方　暁・柴田幹夫ほか	国際センター	2003年10月
続・食べる	山田好秋ほか	歯学部	2003年10月
越後ごぜうた文藝談義	鈴木孝庸	人文学部	2004年 2月
ウラジオストクへの旅	佐藤芳行・イゴリ・サヴェリエフ	経済学部	2004年 2月
顔から学ぶ	花田晃治・寺田員人ほか	歯学部・医歯学総合病院	2004年 2月
コメの国際市場	小澤健二	経済学部	2004年 4月
脳の神秘と疑問	那波宏之ほか	脳研究所	2004年 4月
新潟大学法科大学院はこうして生まれた	鯰越溢弘	実務法学研究科	2004年 6月
弥彦・角田山から地球環境を考える	山岸宏光・濱口哲ほか	理学部	2004年 6月
夢を実現する超伝導	山口　貢・福井　聡	工学部・自然科学研究科	2004年 8月
『食べる』成育編	野田　忠・田口　洋ほか	歯学部・医歯学総合病院	2004年 8月
これからの教育に必要なこと	齋藤　勉	教育人間科学部	2004年10月
古代新潟の歴史を訪ねる	小林昌二	現代社会文化研究科	2004年10月
果実のホルモン	児島清秀	自然科学研究科	2004年12月
新潟の花こう岩の生い立ちを読む	加々美寛雄・志村俊昭	自然科学研究科・理学部	2005年 1月
信濃川の悲劇　減水問題	西澤輝泰・永井雅人	経済学部	2005年 1月
日本人はスギ花粉症を克服できるか	平　英彰	自然科学研究科	2005年 2月
薬とリスク	石原　清ほか	医学部	2005年 5月
深読みシェークスピア	佐々木　充	人文学部	2005年 5月
ルミネッセンス（発光）で探る古代情報	橋本哲夫	理学部	2005年 5月
新潟発『食べる』	山田好秋・鈴木敦士ほか	歯学部・農学部	2005年 5月

新潟日報事業社　発行